魔王で世界最強！

銀さーーん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔界に迷い込み、戻ってきたら今度は異世界に行くことになった!?

家族と仲間たちとまた会うために、この世界から抜け出してやる!!

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 3
第3話 …… 5
第4話 …… 8
第5話 …… 12
第6話 …… 14
第7話 …… 18

第1話

「人間界へのゲートの調整が終わったッス。」
　青いペンギンみたいな生き物、プリニーが俺が帰る世界への調整が終わったと伝える。
「…そっか。……じゃあ皆んな、今までありがとな。特にキリア、お前には本当に世話になった。」
「いや、俺のほうこそ感謝している。お前のお陰で修羅魔界の悪魔たちからこの魔界を守ることができたんだからな。」
「…本当に帰っちゃうのかよ！ずっとここにいればいいじゃねぇか！」
「おいおい、今生の別れでもねーんだ。人間界から魔界に来んのが難しくても、俺たちが人間界に遊びにいけばいいだけだろ。」
「筋肉バカの言う通りですわ。プリニーを連れていけば私たちはいつでも魔界へ帰れるのですから。」
「じゃあ、プリニーさんを連れて行けば、カイトさんも魔界に行き来出来るってことですか!?」
「いや、それは無理です。人間界に悪魔や天使が関わるのは禁止されてます。…今回の人間界へのゲート解放は、カイトさんの今までの功績があり、人間だからです。……実力的には人間と言っていいものか悩むところですが……。」

　仲間たちが次々に話してくる。

　人間の俺が魔界に迷い込み、こうして元の世界へ帰れるのはこいつ達がいたからだ。
　死に掛けてた俺を助けてくれ、弱かった俺を強く導いてくれた。……恥ずかしいから本人達には言わないけどな。
　見た目も、悪魔にとっては幼い女の子に守ってもらうのは精神的に嫌で、凄く頑張った。1人では無理だから力は借りたんだが……。そのおかげでサブクラスを全部マスターし、転生システムとかのシステ

ムを使いまくった結果、最強の称号を手に入れた。
転生システムって凄いな！戦った記憶や経験は残るのに、歳を元に戻せるなんて！コレって擬似的な不老ってやつだろ？
そのおかげで俺はもう何十年とこの魔界にいるのに、まだ魔界に迷い込んだ時と同じ年齢くらいの見た目だ！

この先また現れるか分からないぐらい、生涯で最高の仲間たちと一緒にこの魔界に骨を埋めてもいいが、人間界にいる俺の家族。
恩と仲間たちを見捨てることは出来ずに今まで戦ってきたけど、超魔王も倒して今や平和の世の中。俺は家族に会いたくなってきた。
そもそも、最初の目的は人間界に戻り、家族に会うことだし。

魔界や天界が人間界に関わるのが禁止でも、人間界から関わったらダメだなんて聞いてないし、俺はまたこの魔界に戻ってくる予定だ。
だから、そんなに悲しそうな顔しないでほしい。ましてや、泣く顔なんて見たくない。笑っていてほしい。
俺がそう言うと、みんな笑ってくれた。…泣きながらだったが。
なんか、俺も泣きそうだ。泣き顔見られたくないし、もう行こう。
「またな、みんな。…行ってくるよ」

そして俺は、人間界に戻ってきた。

第2話

時を遡り、世界をを跨ぎ、俺は人間界へと帰ってこれた！
そして、今や俺は高校生だ！
うろ覚えだったので、家に帰るのに時間がかかったが、なんとか帰り着き懐かしき家族と会えた。
不覚にも泣いてしまったが、思春期特有のアレって感じで家族みんなに笑われた。
勉強の方が厄介だった。戦いばっかりで数学とか記憶の彼方に消えていたからな。勉強に戦闘訓練、名前を思い出せないクラスメイトたちに悪戦苦闘しながらも地元の高校に入学した。

ただ魔界での生活が長過ぎた所為か、度々やらかしてしまい問題児扱いされてるが……。
友達はいるから問題ない!!オタクだが、普通に接してくれるいい奴だ。そしてそいつの事を好きな白崎さんもいい奴だ。

そして何事も無く高校を卒業したら魔界に行く予定だったのになー。
何でまたこんな事になるんだか。
まぁ、どんな世界であれ俺はまた、家に帰り、魔界にいる仲間たちに会いに行くまで止まることない。簡単なことだ。どんな障害があろうと踏み潰し進めばいつかゴールにはつくんだから。
とりあえずはみんなの後についていくとするか。

おじさんが長々とこの世界のこと、そして世界に戻る術はないとかいい、正義馬鹿の天之河光輝に色々と吹き込んでいく。
……みんなは気付かないのだろうか？魔人族と戦争。喧嘩みたいに倒したらお終いじゃない。殺しをしないといけない。
力があったとしても、魔人族も強いんだろ？手加減しながら戦えるのか？

どうせいつかは考えることだし、今言ってもいいよね？

「イシュタルさんだっけ？ちょっと黙っててくんない？……天之河光輝君、それとソレを肯定した3人にさ、聞きたいことがあるんだよね。……魔人族のことなんだけど、よーく考えてみなよ。魔人……魔の人、見た目がどうか分かんないけどさー、俺たち人間みたいに感情もあるでしょ、だから族名に人が付くんだから。……それで君達は世界を救うって名目で人を殺せるのかい？……そして、元の世界に帰ったとき、君達は今までの日常に戻れるのかな？」

ふぅ、喋り疲れたー。

周りが騒しくなったけど、あの4人組の答えはどうなのかな？それ次第で俺は身の振り方を考えよう。

「殺しはしないさ、力もある。今から鍛えれば殺さないで無力化出来るはずさ！」

あ、駄目だこりゃ。そんな甘い考えで見知らぬ世界を生きていくなんて。皆んなもアレについていく感じかな？だったらゴメンだけど俺は途中で抜け出そう。

俺は俺1人でこの世界から脱走しようと思った瞬間だった。

第3話

ステータスプレート。自分の客観的ステータスを数値化してくれる優れもの。身分証明書にもなるらしい。成る程、いいものなんだろう。

だけど、今の俺には欲しくないものだ。どうか神様、エヒト様ー。俺に不良品のステータスプレートを!!

桐生快斗　17歳　男　レベル：9999
称号：超魔王
HP：1805975194７
SP：99999999
ATK：99999999
DEF：99999999
INT：99999999
RES：99999999
HIT：99999999
SPD：99999999
技能：言語理解・全属性適性・全属性耐性・物理耐性・全武器適性

はい、アウトーーー!!!てか、転職教えてくれんだろうが!?
称号になってんぞ!しかもステータスが魔界風なんだが!?
「神のクソ野郎がぁーー!!!」
つい、ステータスを空の彼方へと投げてしまった。
ふぅ、いい仕事をした。
だが、手元にはステータスプレートがある。

「巫山戯んな!!呪いの装備か何かかこれは!?」
ん?ステータスプレートの技能欄に『偽装』というのが増えてる?
これは使える!!
偽装と唱えると、ステータスが1減った。

「……馬鹿か!?何回言わせる気だよ!!マジ使えねぇなコレ!!」
この世界の情報を得、金目の物を奪ってこの城からでる作戦が台無しだ！
いやいや、異世界っていったらステータス確認が出来るのがテンプレ。俺の計画が甘かった。
とりあえず、八つ当たりにステータスプレートを地面に叩いときにできたクレーターのことをメルト団長には謝っておこう。
と、思ったが皆んな俺を呆然とした顔で見てくる。あ、しまった!?
動揺して力加減間違えた！ここは魔界じゃないからクレーターぐらいでもヤバい出来事だった。
アハッ、やっちゃった。
「……アレだよ。アレ、技能を使ったらこうなったんだよ？皆んなも使ってみるといいよ、うん！」
「えっと、快斗君？……無理があると思うよ、その言い訳。」
「ハジメ。お前、俺を裏切ったな!?」
「いや、裏切りとかそんなんじゃなくてさ……。」
「分かってるよ、そんな事はさ。ただ、認めたくない現実っての誰しもあるもんじゃん？……え？ないの？まさか俺だけ？イヤイヤイヤ、まさかー。檜山君とか絶対あるでしょ！だって、好きな子に好きな男がいるんだから！しかも絶対に檜山君には振り向くことはないだろうし。…あ、天之河君もか？幼馴染だから一生一緒にいるとか勘違いしてそうだし！……いや、間違えた。アレは現実が認められないってより、現実が見れてないただの馬鹿か！」
「……快斗君、気付いてないと思うから言うけど、今までの思って

る言葉、全部口に出てるよ。」

なんだって!?

第4話

ステータスプレートを公開後、案の定大騒ぎになった。
先走った騎士の1人が王様に報告したらしく、王様やらお偉いさんが吹っ飛んできた。エヒトという神を崇拝してる人たちが俺のことを御使いだとか、これでこの世界は安泰だとか言っているが、ホント馬鹿ばっか。
勝手にこの世界に連れてきて助けて下さい。ンなことエヒトっていう神にさせろよ。いるんだろ？帰る方法はありません。力はある筈だから戦争に参加して勝利して下さい？……言いたいことは沢山あるがお前らが理解できるよう、簡潔に述べるよ。
俺はこの世界を救う気なんてない。ささっと世界の渡り方を見つけ、元の世界に帰る。邪魔してきてもいいが、良くて身体の一部がオサラバするのを覚悟する事だね。

俺はこの場にいる全員が気絶はしない程度の強さで殺気を放った。あぁ、ハジメとオマケして白崎さんは殺気を感じさせないよう頑張った。まぁ、多少は感じてるだろうけど。……手加減って難しいんだよ。

「…あ、メイドさんちょうどいい所に来てくれたね！俺が寝る予定の部屋まで案内してよ。」

「え!?待って！今の雰囲気的に城から出る所だったよね!!」

みんなもそう思ったのか首を縦に振ってハジメを肯定している。

「馬鹿だなー。この国の王様がいる城なんだぜ、此処は。異世界へ帰れる書物が有るかもしれないだろ？無かったとしてもこの世界の情報を得られる。本の著者の主観が混ざってるかもしんないけど。無いよりはマシだろ？」

「いや、そうかもしんないけどさ……。」

「あ、もしかして心配してくれてんの？大丈夫大丈夫。虫を払うくらい簡単さ。それに、ここの連中もクラスの気分を損ないたくない筈だしね。」

「…力がある皆んなが一斉に暴れたら国が勝ったとしても損害がでるから、とか？」

「うんうん、流石は俺の友達。いい線いってるね。人を殺すとか、犯すとかしなければ大抵は許してくれる筈だよ。訓練のとき以外はね。」

エヒト神を崇拝してる連中が、そのエヒト神が選んだ救世主達を攻撃するなんてあまり考えられない。

エヒト神が今後どうゆう風にするかは知らないけど。

俺は皆んなが呆然としてる中、メイドに案内してもらうため歩き出した。

そして俺はあのステータスプレートこ件以来、基本的に書物庫に篭っていた。

暫くぶりに身体を動かそうかな？迷宮に着いて行けばよかったとちょっと後悔しながら俺は城を抜け出した。

書き置きはして来た。

１週間くらい遊びに行ってきます。探してもいいよ？

ＰＳ・王様お小遣い貰いました。

テンプレのギルドに入り、クエストをクリアして異世界を少し満喫したので、城に戻ると俺の部屋の前に青白い顔をした女と八重樫さんがいた。

「……あ…桐生君!!」

青白い顔の女が走ってこっちに向かってくる。

「…え!?何？怖いわ!!……し、白崎さん？どうしたの？」

本気で逃げそうになった。想像してごらん、青白い顔の女がもうダッシュでこっちに向かってくる姿を。しかも今は夜だ。お化けと一瞬思っても仕方ないと思わない？

「南雲君が！…ベヒモスってモンスターがトラップで、残った南雲君が橋から落ちて！」

「あー、ゴメン。もうちょっと分かりやすい文章にしてくんない？」

「何で分かんないの!?南雲君が……南雲君がぁ。……守るって約束したのに。」

「香織！しっかりして！」

んー、とりあえずハジメが何かあったのかは分かった。よく見ると八重樫さんも顔色が悪い。

「八重樫さん、ハジメになんかあったの？」

話を聞いて俺は2人に迷宮に行ってくると伝え、走った。……空を。

「…月歩って本当に使える技だったんだ。」

八重樫雫、少しだけ漫画と現実がごっちゃ混ぜになってしまった瞬間だった。

第5話

「クソッ、賢者がいればこんな雑魚を相手しなくてもいいのに！」

俺は悪魔じゃなく人間だからか固有技持ってねぇんだよな。一掃出来るからといって強い技を使ってこの迷宮が崩落したら助けに来た意味がない。……生きてんのかわかんないが……いや、雑魚で馬鹿だった俺が魔界で生きていけたんだ。助けられたのもあるが、魔法の魔の文字すら分かんなかった俺よりは可能性はあるだろう。

俺はキリアみたいに、ヴォイドダーグの犠牲者をこれ以上出したくないからと言って他人を助けるほど優しくはないが、友達や仲間は絶対に助けるって決めたんだ！可能性があるならそれに賭ける!!

「ハジメーー！何処にいるんだ！いるなら出てこーい！」

あー、大声出してるせいか魔物がドンドン寄ってくる。力の差が分かんねえのか、唯本能的に襲うのかどっちか知らないが鬱陶しい!!

今何階層にいるのだろうか？けど、少し安心した。

前の階層で気付いたが戦闘跡がある。しかもこの世界にはない筈の拳銃跡。ハジメだろう。多分、錬金して造ったのだろう。

「ハハッ！流石俺の友達、俺って見る目あるー。」

嬉しくてちょっと自画自賛。アイテム界みたいに敵も強くなっていくと思って段々だけど、魔物のも弱いまんまだしこれなら大丈夫そうだ。まっ、この迷宮をクリアして抜け出してすれ違いみたいなのは嫌だし、さっさと行こう。

桐生快斗にとっては今更敵のステータスが１００上がっても大した差はないかもしれないが、普通の人間にとっては１００の上昇は劇的である。……まぁ、その勘違いもハジメたちと出会って解消するのであまり意味にいが。

……どうしよう？俺は友達が大人の階段を登ってる姿を目撃してしまった。夢中なのか気付いてくれない。

いや？気付かないほうがいいのか？お互いにとって。

途中から気配遮断を手に入れたからずっと使ってるんだけど、コレのせいかな？

まぁ、終わるのを待つとしよう。あっちの部屋に椅子があったし、そこで一眠りしよう。

てか、生きてるのを確信してからはゆっくりと進んできたけど、途中で合流できると踏んでたんだが……。気配遮断に甘えて久しぶりに爆睡したせいか？魔界の生活のせいで、たまに二日間寝続けることがあったし。皆んな疲れてるんだろうと起こしてくれず、ロスト軍に挑んで行ったときはマジで泣きそうだったなぁ。

実力不足で置いていかれたと思って。

今日はちゃんと朝には起きないと。……ハジメを弄るために!!

第6話

俺は本気で気配遮断を発揮し、2人が此処に来るのを待つ。
そして扉が開いた瞬間を狙って、気配遮断を解除した。

「やぁ、ハジメ！昨日はお楽しみだったね！」

「ッ！……桐生？どうして此処に……まさか。」

銃を此方に向け、警戒していたハジメだが銃を仕舞う。

「うん、きちゃった！隣りの子もそんな警戒しないで欲しいな。ハジメの彼女さん！」

「!!……あなた…いい人。…そう、私はハジメの女。」

「アハハハー！そっかそっか！俺は桐生快斗。ハジメの友達でクラスメイトさ。よろしくね、ユエちゃん。……あ、名前ユエで合ってるよね？ハジメがそう言いながら抱いてたから合ってると思うけど…。」

ガチャ！ドカン!!
流れるようにハジメが発砲してきた。

「いきなり酷いなー。…照れ隠し？」

俺は首を傾げ、避ける。けどこれならあたっても大丈夫そうだ。

「…！……避けた…の？」

目を見開いて驚くユエちゃんに、更に発砲しようとするハジメ。
話しにならないから軽～くデコピンをするとハジメは吹っ飛んで

いった。それを見たユエちゃんも魔法を放とうとしてきたがその前に俺はマフージを放ち、戸惑っている間にデコピンをかます。ハジメのように吹っ飛んでいった。
若い子は短気なんだから。

「ヤッホー!やっとお目覚めかな?……そんな不機嫌そうな顔するなよ。」

「……ちょっと性格変わってないか?桐生。」

「いやー、途中で生きてるって確信してたんだけど、いざ対面すると思いの外嬉しくてね。……よく生きていてくれたね。ありがとう。俺にとって友達や仲間が死ぬのは四肢が捩がれるより苦痛だから。」

「お前の為じゃない。…俺は、そうユエと一緒に故郷に帰る為にやっただけだ。」

そう言うなら顔を背けずいいなさい。

「故郷…元の世界に帰る……ね。……何かてかがりでも見つかったのか?」

「……はぁー。……ざっくり言うと……。」

ハジメは渋々そうにこの迷宮で知ったエヒトの正体、反逆者たちは解放者だったなどを教えてくれる。そして神代魔法とか、迷宮のことかを。

「授けられる神代魔法のどれかに世界を渡れる魔法があるかもしれないのか……。それで?ハジメはどうするの?できれば旅に連れて

行ってほしいんだけど。」

「…何で？桐生の力があれば1人で迷宮もクリアできるのに。」

「それはね。戦いたくないからさ。」

「死ね！」

また撃たれた。俺、悲しいよ。

「あー、ちゃんと理由あるんだぞ？だから撃つのやめてくんないかな。…鬱陶しい。……それで理由はな、手加減が面倒。」

ガチャッ！

「お前本当に面倒なんだぞ！殺さないように攻撃するのも、洞窟とか迷宮とかもちょっと力加減間違えたら崩壊すんだから！あのデコピンも頭が弾けないか少し心配だったくらいだ。」

「じゃあするなよ。」

「鬱陶しいのは嫌いだ。連れて行ってくれたら、俺の持ってるアイテム貸すからさー。街規模以上の戦闘とかも手伝うしいいだろう？国とか相手だったら役に立つと思うぜー！」

「何で国相手なんだよ。…アイテムもな、アーティファクト作れるし。」

「今のハジメならするね。まっ、それは置いといてアーティファクトより強いよ。俺のアイテム。…試しにコレ使ってみな。」

俺は波動粒子魔砲（修羅）を渡す。強化もしてないけど充分だろ。
ハジメは何気なく壁に向かって撃つ。
アレ？この星脆すぎじゃね？
何百メートルの空洞。あと、ハジメの肩が外れた。…良かったね千切れてなくて、本当にそう思った。
修羅武器は使わないようにしよう！となったらパイとか傘みたいなもんしかないな。……ハジえもん！俺に武器作ってぇー！

第7話

あの後、ユエちゃんが起きてあの現状を見て襲ってきたり、武器を作ってもらったり、ハジメとユエちゃんの情事をカメラで録画し、それを盾に一緒に旅に連れて行ってと駄々をこねたりと色々な事があった。

ユエちゃんに発情しなかったかだって？よく考えなよ。俺は何十年と魔界にいたんだ。魔界の女性たちの過激な服装。それに、童貞じゃない。

ムラってはしたがユエちゃんを襲うほど発情しませんでした。

色気が足りないね。だから我を忘れて襲うことはなかった。

だから安心してって言ったら、２人に襲われた。暴力の方で。

…返り討ちにしたけど。本当に短気なんだから、困ったもんだ。

武器の方は剣にしてもらった。斬れ味皆無のただのでっかい鉄の棒みたいな感じだけど。壊れないからいっか。

それから2カ月間、たまに2人と戦闘訓練という名の俺による一方的な攻撃をしたりして鍛えたり、迷宮から抜け出し冒険者として活動したり楽しんだ。そして今日、2人がこの迷宮から抜け出す日がやってきた。

ハジメとユエちゃんによるコントと決意を言い、外に出た。

俺は何回も出てたから分からないが2人は何か感慨深そうにしてる。

え？洞窟でのツッコミ？なんのこっちゃ。俺が何回ここから出てると思ってるの？ハジメたちには言ってるよ。

「俺を倒せないのに最強とか……ププッ！」

「あぁ、言葉が足りなかったな。人類最強だ……な、ユエ。」

「ん！…桐生を見てると私なんて、ただ血を吸う…ちょっと魔法が強い人間。……ありがとう。」

「それは俺を人間じゃないと言ってるのかな？……ちょっとＯＨＡＮＡＳＨＩしようか。」

「え？気にしてたのか？」

「自分で言うのと人に言われるのは違うんだよ、厨二病。……漆黒の暴虐…紅き雷の錬成師……フハッ、どれがいい？まだ、あるよ。……いっそのこと全部にするかい？フフフッ！」

「お、お前は悪魔か!?…けどソレ＝俺とは皆分かんねぇだろ？」

「馬鹿め！自分の今の格好を鏡で見てから……いや、自覚がないならそのままでいいんじゃないか？」

「大丈夫……ハジメ、格好いい。」

「ユ、ユエ！」

「ファンタジー世界のファンタジーキャラにとって格好いいんだって！良かったな！…ファンタジー的には似合ってるよ！……アッハッハッハッ！」

ハジメを茶化していると魔物が集まってきた。ささっ、ハジメ。ヤって下さいな。後ろで笑いながら見守ってるよ！

……レールガンね。いつか来るかクローンが出てくるかもね！

「うわ！何も言ってないのに！」

ハジメが魔物と戦いながら、俺に発砲してきた。

「今、絶対変な事考えてただろ!!」

いつから心が読めるようになったんだろうか？